実習をする際の大人のためのチェックポイント

① 楽しかったね！だけでは、もったいない！

チリモンさがしをして、見つけた種類を貼りつけるという工程は楽しいものですが、それで終わりにしてしまうと少しもったいない気がします。チリモン実習を通して何を伝えたいか、指導者側が目標を持ってとり組むことができると、この実習により意味を持たせることができます。

② 種類がわからないとチリモンはできない？

チリモン実習の楽しみ方は、名前を調べるだけではありません。同定できない種があっても当然で、専門家でも見分けられない種がたくさんいることも、子どもたちに知ってもらいたいことの一つです。また、同定（グループ分け）をする際に、種類までわからなくても、「魚のなかま」、「エビ･カニのなかま」、「タコ･イカのなかま」、「それ以外のなかま」という大きな分け方で考えると、実習のハードルは一気に下がります。海の生き物に関する知識がなくても、実習は可能です。

③ これなに？　をこわがらないで！

子どもたちは､すぐに「これなに？」って聞いてきます。大人なんだから、「これはね、○○だよ」って答えてあげないといけない、って思っていませんか？

もしかしたら子どもたちの「これなに？」は、「これが何であるか」を知りたくていっているのではないかもしれません。たとえば「これについて何でもいいから話をしたい」のだとすれば、「これ」の名前をあなたが知らなくても、「これ」についてのいろんな会話をしてあげられるのではないでしょうか。

④ 名前がわかったら興味がなくなる？

「これなに？」と聞いた子どもに､「これはタチウオだよ」と答えたとします。子どもたちは意外にも、「タチウオってどんな魚？」と聞いてくることは少ないのです。「タチウオか。わかった。じゃあ次の､これはなに？」となります。タチウオを知っている子どもであれば、「あぁ、あのタチウオの赤ちゃんなんだ！」って理解できるかもしれませんが、タチウオを知らない子どもの方が圧倒的に多いのです。名前を確かめて覚えたとしても、それでタチウオを知ったことになるでしょうか？

⑤ まずは、見つけたことを認めてあげよう

「おー、いいの見つけたねー」、「○○ちゃんはこんなの見つけたのか」とまずは認めてあげましょう。子どもたちは、自分で見つけたものを見せたいとき、見てもらいたいときにも、「これなに？」っていっちゃうのです。子どもの「自分がいいと思ったものを人に見せたい」という気持ちは、とても大切にして育ててあげなければなりません。

そのためにも、まずは「見つけたことを人に見せるのはいいことなんだよ」という思いを込めて、「見つけたんだね」と認めてあげましょう。

⑥ 自分が思ったことを言ってあげよう

「このチリモン、長細いね」、「すごく長いね。ヘビみたいなチリモンだね」、「これって一番長いチリモンじゃない？」、「どうしてこんなに長いんだろうね」、「真っ白できれいだね」、「顔のところよーく見て。大きな歯があるよ。何食べてるんだろうね。ヘビみたいに咬むのかな？」、「けっこう怖い顔してるね。ほかのチリモンより怖い顔と思わない？」

こんなふうに、見たらわかること、見たことから思ったことを、言葉にしてあげましょう。観察というのは、目に見えていることを言葉にして確認していくことが基本です。大人が興味を持って観察している間は、子どもは離れていかないものです。

⑦ 名前を知っていても、時には名前を答えないこともあるよね

名前を自分で調べるプロセスはとても大切です。もし、手元にチリモン図鑑があるのなら、子どもが自分で調べられるように促してあげましょう。図鑑で調べるときにこそ、「長い」、「白い」、「歯が鋭い」などの特徴がわかっていることが大切です。そういう手がかりをもとに、ほかのチリモンとの違いを把握し、同定していくという作業を、できるだけ子ども自身ができるようにしたいものです。図鑑で調べるときには、いつとれたか、どこでとれたか、ほかのどんな生き物と一緒にいるか、という情報も手がかりになります。絵あわせができる状況であれば、「どれに近いかなあ…」と一緒にさがしてあげましょう。「ヒレの形を見てみよう」、「頭の形はどうなっているかな？」と、見る視点を提供することでも、子どもたちの見方は大きくかわってきます。

⑧ 子どもが実感しやすい説明を

「エソはかまぼこの材料」とか「タチウオはこんなに大きい」とか「アイゴは英語でラビットフィッシュという」とか、子どもたちがイメージしやすい説明をするように心がけましょう。魚についての知識があるのは素晴らしいことですが、イメージできない説明は子どもたちをつまらない気持ちにさせてしまいます。また、大人が感心する話題と子どもが喜ぶ話題は全然違いますので、自己満足な説明にならないようにしましょう。逆に、子どもがその魚について知っていることはどんどん口に出してもらい、子どもから教えてもらう気持ちで聞いてあげてください。

⑨ めずらしいチリモン

チリモンの中には、いつでもたくさん見つかる種類から、めったに見つからない珍しい種類までいろいろあります。珍しいものは「レアなチリモン」とか「レア度が高い」とかいって特別扱いされることがあります。でもそれは、自然界で珍しいとか貴重だということではありません。ちりめんじゃこに混じりやすいか、混じりにくいかは、知識として何かの役に立つわけでもなさそうです。「これ、はじめて見たわー」、「図鑑にも載っていない新発見とちがう？」と発見の喜びを共有することは、子どもたちにもっとさがそうという動機づけを与えるでしょう。でも、珍しいものの価値が高く、ありふれたものの価値が低いという捉え方をさせないように心がけたいものです。

⑩ 見せあうことが大切

見つけたものを人と見せあいっこするのはとても嬉しいことです。人に見せることは、自己を開示して受け入れてもらうこと。人に見せてもらうことは、他者を受け入れることに通じます。そういう意味でも仲間と一緒に、また知らない子と一緒に、チリモンさがしをすることは、1 人でするよりも大きな意味があるのです。

＊チリメンモンスター WEB インタラクティブ図鑑に掲載されている内容を一部改変して使用。

長岡京市・提供